

・「モノ」の生産高（量）の大きさをもって、行政需要、目的の軽重を、存在意義を云々することは、いっけん正しいように思われますが、農産物は工業製品などとは生産基盤がまったく違う。農業は自然が相手。土、水、森林、太陽の光の自然の恵みと、多様な生物たちの自然の絶妙な営みのなかで作物は生育して実ります。人為的に管理、制御された環境の下で、高能率に集中生産される工業製品のように生産性をあげることも、加工することも、鮮度よく貯蔵することもたいへん困難。どこの国、いつの時代を見まわしても、一次産業、農林水産業の地位は経済成長すれば、科学技術が発達すれば低下しています。だからといって、農業をことさら軽視し、軽視する風潮をもとにして、自国農業をおろそかにしたり、農業復興に注ぐ力を弱めたりするのはよいことではありません。

・アフリカ、南米などの南世界を中心として飢饉、飢餓に苦しむ国や難民の多いこと、北朝鮮やフィリピンも厳しい食料事情を抱えていることを見聞しています。12 億人の人口を抱える中国が将来も食料自給できるか、世界の関心と懸念が集まっていることも。ひょっとすると、今、世界中の国々ではコメ不足、食料不足が起きつつあるのではなかろうか、心配を感じます。世界の中で、コメをはじめから輸出作物、換金農産物として扱っている国はタイと米国だけ（原 剛「日本の農業」岩波新書）。コメの生産高第 1 位と第 2 位の中国とインドをはじめとして、大部分のコメ生産国は自給を主として、国内で消費しきれなかったコメを輸出にあてているにすぎない。このため輸出されるコメは総生産量のわずか 3%前後、凡そ日本一カ国分の消費量にとどまっているという。コメは国際貿易作物ではありません。

・5,484 名の人々が亡くなり、30 万世帯の家屋が崩壊する大惨事となった阪神大震災関連のニュースを聞いていると、涙と感激を抱かずにはおられない。そして普通の生活を安心して過ごせる社会であることが何よりも大切であることを、そのためには生活の基本である衣食住はしっかり守っていかなければならないことを思い知らされます。どの生物であっても、エサ場を生息地の近くにもっている。これ、生物学、生態学の法則だそうです。人間もモノや物質は我慢できても、空腹には耐えることが出来ません。「自らの食べ物は身近なところでまかなう」「食料は自給自足」を大切にしなければなりません。

・農地は手抜き作業、単一的な機械化、化学肥料・農薬の多投、連作障害、環境の荒廃で土地疲労、やせ田、農薬蓄積等の問題が進行していると聞きます。「冷夏、低温」「カラカラ天気、水不

足」「台風、地震」といった異常気象や大震災が起きると、たちまち凶作が心配されて仕方がありません。今夏は大丈夫でしょうか？……

・世界の人口は途上国を中心に1年で約8,000万人も増える「人口爆発」が続いています。人口増加がつづく一方、地球温暖化の影響などを受けて世界の耕地面積は減少し、世界全体で1年間に日本の耕地面積を上回る500万haの農地が砂漠化している（農林白書）。世界の食料事情は実際どうなっているのか、そして今以上に、将来はどうなるのか逼迫していると申せます。

ラジオで聴いた話

1. 漁業組合理事長

昭和20年代には東京湾で漁業していた人が1,200人もいた。それが今では80人前後に減ってしまった。昭和40年代に入ってはじまった国をあげての高度経済成長政策の推進で、東京湾は次々と埋め立てられ、砂州や海岸線は消滅して豊かな漁場がなくなってしまった結果だ。当時、これからの漁業は遠い海に出かけて、魚を大量に採ってくる時代になると吹聴されました。地元漁民たちは、きそって銀行から多額の借金をして、りっぱな大型漁船を建造し、設備も通信装置も最新の機器を備えた。それが、次第に漁業保護、乱獲規制の運動が沸き起こり、各国の漁場は沿岸20（？）カイリ以内とする国際条約が制定された。それはそのまま遠洋漁業を困難なものにし、今となると、利潤を求めて単一の漁業で規模拡大を目指した遠洋漁業に代わって、別に借金することなく、手持ちの小さな船で、自分が食べる魚を採って分けてあげる。結果として儲かる。儲かるからといって決して無理にたくさんは採らない。そんな生活者としての魚釣りに取り組んでいる沿岸、近海の漁業が大いに見直されてきている。モノの生産量、消費量は年々伸びなくてはいけない経済成長志向の発想は生き残る唯一の道であるのかを考えてしまいました。

2. 文化勲章を受章された大学名誉教授

田、畑、山々のみどり、自然は、汚れた空気や炭酸ガスをきれいに浄化します。地中にたっぷり保水して地下水に、一部は雨雲になって大気循環します。自然災害から国土が守られています。田園風景は人の気持ちを和らげます。精神衛生にもたいへんよいです。これらはカネをいくらだしてもぜったいに買えるものではありません。一度、壊れた自然を、環境を元に戻すのは非常に難しいのです。